総 括 討 論

パネリスト

発題者

ベルンハルト・シャイド ヤン・ファン・ブレーメン フランソワ・マセ ヘレン・ハーディカ 李 元範 コメンテータ 林 淳

司会

井上順孝



I. コメント

【司会】それでは、最後の総括討論に入りたいと思います。

冒頭にも申しましたように、これは連続シンポジウムの第1回目ですので、今後の展望につながるようなさまざまなご意見を皆さんから頂戴して、深みのあるプログラムに持っていきたいと思っております。これまでの5つのセッションはそれぞれの国についてでしたが、今回はそれをクロスさせて、さらに肝心な日本の現状も当然それに絡み合わせる必要があると思います。

そこで、きょうはコメンテータとして愛知学院大学の林先生に来ていただいておりますのでコメントをお願いし、そして発題者の方々から、それに対してお答えいただく内容があればお答えいただき、その後、フロアの方々に加わっていただいて議論をしたいと思っています。

とくに、いままで全然発言なさならなかった方も、ぜひ総括討論では遠慮なく挙手して いただいていろいろな方々のご意見を頂戴したいと思います。それでは、林先生、よろし くお願いいたします。

【林】林でございます。今回こういう形で、それぞれの国における日本研究といいますか神道研究を聞かされて、全体の国々の学問史の中でどういうところにあるかということを教えていただいたのは最大の成果だったと思います。

お一人お一人のお話を簡単に振り返ってみますと、シャイド先生のお話は「ドイツ語圏における日本研究」ということで、ここで非常に重要だったのは政治的な影響ということになります。つまり、日本でも有名なデュモリン(Heinrich Dumoulin)先生は禅仏教研究の大家で南山の宗教文化研究所の所長というイメージでとらえていたのですが、戦前は賀茂真淵の研究者であったということをはじめて知りました。そのときには、戦前における日本とドイツという関係の中で、ナチズムに近い知識人たちの中から日本研究が生まれるとか、日本精神を明らかにするようなことで国学的なものを勉強された。戦後は、そこから離れていくということを興味深く伺いました。

あと、「パラダイムの転換」ということをシャイド先生は言われて、戦前では哲学とか、神学とか、文献学が中心の日本研究から、今日では社会人類学、社会学の研究に移っていると言われました。これは恐らく、ドイツ語圏だけではなくて、第二次世界大戦以降の学問、アメリカでも日本でも同じようなことが起こったのではないかと思います。ですから、現状についての分析が多くなっていることが改めて分かりました。

ブレーメン先生からは、オランダの歴史ある日本研究の状況を教えていただきました。 これは現在でもその伝統が続いていて、日本研究が着々と行われていることがよくわかり ました。先生のお話の中では、キリスト教系の大学の宗教学として行われる面と、国立大 学の中でとくにエスノロジーと関連させて研究する。そういう、両面があるということで すね。

質問にエスノセントリズムとオリエンタリズムという話が出てきて、私もそこがよくわかりませんでしたが、キリスト教系大学の宗教学では、もともと牧師とか神父が神道なり仏教なりを対象にして、異なる宗教を研究するときにキリスト教を基準にして、そこから問題意識を立てていくというのはキリスト教中心主義といいますか、エスノセントリズムとはまた別な問題だと思います。クリスチャンセントリズムといいますか、それは宗教学の展開とともに絶えずあっていまもあることで、オリエンタリズムと自民族主義のことも重要ですが、それはまた別に論じる大きい問題だという感じがしました。

マセ先生は、宗教学が大学の組織の中で基本的には存在しないというところから始まりました。お聞きした話では、フォークロアの中で神道研究と言っていいかもわかりませんが、日本の古典の研究とか、民間信仰の研究とか、そういうのが行われている現状が具体的にわかってきました。

ここでは国立高等機関の宗教部会は、神道講座はないけれども民間信仰講座があるというお話がありました。そういう民間信仰、フォークロアという研究伝統がフランスには根強くあるのでしょうか。その辺り、もう少し説明を受けたらおもしろいのではないかと思いました。

ハーディカ先生からは、近年の研究を非常に具体的に教えていただきました。直接、神道の話というよりもダウワー (John W. Dower) の研究とか、ビックス (Herbert Bix) の『昭和天皇』とか、あるいは現在の人類学的な研究を紹介していただきました。いずれも、



神道をとくに意識していない。これは、さっきのマセ先生の話にもあったと思いますが、 神道は研究していなくて神道について触れている研究者は多いという話です。これは、全 体に言えることだと思います。

李先生は、日本の戦前の統治による植民地時代があって、その植民地教育に対する反発の中から国家神道に対する関心が出てきたことを話されました。日本語教育が非常に、日本との接点を求めるようになり、多くの大学で日本語教育が行われるようになっている現状があったということ。これは、勉強になりました。

一つ一つの具体的な問題自体が非常におもしろい問題を含みますが、幾つか見渡してみるといいますか、それぞれつないでいくために何が必要かと考えると、5つの観点を指摘したいと思います。

1番目には、韓国、アメリカ、あるいは西欧の国々でもいいのですが、それぞれの国と 日本という国が20世紀においてどういう関係にあったか。19世紀に遡るかもしれません。 そして、第二次大戦がどういう影響を与えたのかは非常に重要なことではないかと思います。

先ほどドイツのナチズム時代に国学などの日本研究が奨励されて、その後、第二次世界 大戦後になると今度は神道研究が消えていくという状況もそうですし、韓国の国家神道研 究もそうだと思います。また、ハーディカ先生が紹介したような研究も、第二次大戦後の アメリカにおける日本に対する関心、日本研究が非常に盛んであるということの一端と理 解できると思います。

非常に大雑把ですが、それぞれの国と日本との関係。とくに、第二次世界大戦という戦争が大きなエポックだろうと思います。「国家神道」というテーマ自体も、そこに関係するかと思います。

2番目は、それぞれの国で日本語をマスターする、あるいは、それを学んで研究者になるというのは非常に少数だろうし、また非常に困難だろう思いますが、日本語教育、あるいは日本研究が、その国の高等教育の中でどのような形で設置されて、どのようにいまに至るのかということについてもうちょっと知りたいと思います。

アメリカの日本研究は戦後非常に盛んになってくることがあると思いますが、当然、日本語教育が行われて盛んになってきたと思います。あるいは、フランスなどにおいては東洋学の厚みがあると思いますが、中国学とか仏教学とか、そういうものと日本語を教える場所がどういう形であるのかというのを教えていただければと思います。

3 番目は、先ほども少し話が出しましたが、パラダイム転換ということです。学問が古典の研究とか文献研究がいまでも重要な研究として行われていますが、そういう研究が人文社会科学中心であった時代から、社会学とか人類学とか具体的に現在の問題を調査する。そういう研究が盛んになったのは恐らく 1970 年ぐらいからではないかと思いますが、それがヨーロッパ・アメリカ・韓国の場合も、現代的な問題意識に支えられた日本研究を生み出していて、神道研究も例外ではないという感じがしました。

4番目は、私の印象ですが、果たして神道研究者がいるのかという感じがしました。恐

らく、ここにおられる先生方は日本のことについては何でも知っておられて、先ほどハーディカ先生が、「『古事記』からオウム真理教まで」と言っていましたが、さらに宗教学を専門としない文学を教えている先生もおられると思います。その場合には、扱う範囲は「『源氏物語』からオウム真理教まで」かもしれません。そのような日本研究の一環として、あるいは、もうちょっと狭めて日本宗教の一環として神道を、それぞれの研究機関でどう教えるかというような問題ではないかと思います。

これは私の価値観が入っているかもしれませんが、神道だけを取り上げて神道だけを教えるということではなくて、日本の宗教史とか日本文化史の中の神道を教えるという形に 現実にもそうなっているでしょうし、神道研究というのはそういうものではないかという 気がします。これはかなり異論もあって、国学院大学の神道史入門とかを担当されている 先生方は、「そんなものではない」とおっしゃるかもしれませんが、私はそういう感じがしました。

5番目は、先生方のお話を聞いて思ったのは、日本ではどうかと考えると、ナチの時代の話をシャイド先生がされました。日本でも戦前にあった神道研究というのは、東大の神道講座が閉鎖されるように、あるいは神宮皇学館大学が閉鎖されたように、研究機関が大きく痛手を受けるといいますか、そのことは重要なことだろうと思います。ですから、戦前からの神道史研究の伝統が、ある種、途絶えるというわけではなくて続いているのでしょうが、研究機関の問題で戦後の神道研究は研究機関を失っていったということはあったと思います。

そして、神道研究が、国学院の日本文化研究所などはそうだと思いますが、かなり広い 視野から民俗学とか宗教学とかを入れた視野からの神道研究をつくり出してきたという形 だと思います。

とりとめもない話をしましたが、そこで思うのは「近代日本と神道」という問題を、日本の研究者は一生懸命勉強しなければいけない。「近代日本と神道」を一生懸命勉強する、ただ、国家神道研究だけではないと思いますが。日本の研究者には、そのことに関する説明責任があるのではないかと思いました。

恐らく、神道の問題が単純に学問の問題だと言えないのは、これは神道ではなくて仏教 もそうだと思いますが、近代のナショナリズムを支えたり、母体になったりする問題があ るし、政教分離の問題もあるし、靖国問題という問題もあるでしょう。いろいろなレベル を現実的に含んでいるような問題ですが、それを学問的なレベルで支えていくのは、近代 日本における神道とか宗教という問題を日本の研究者が一生懸命研究して、いい成果を出 していかなくてはいけないのではないかと思います。

コメンテータの役をはたせたかどうかはわかりませんが、以上で、私のコメントを終え たいと思います。

Ⅱ. 応答

【司会】ありがとうございました。これは、個々の先生にどの問題をという形にはなっていませんが、お1人ずつお願いしたいと思いますので、シャイド先生からお願いします。

【シャイド】まず、日本語の教育について話したいと思います。もちろん義務教育とか高等学校の中で日本語の教育はあまりないので、大学に限ります。その点で、日本文化を直接研究する前に日本語も勉強しなければなりませんから、日本研究ということは、まず日本語の勉強に非常に時間がかかると思います。

その点で、将来は義務教育の中で日本語の授業があれば、大学での研究も進むと思います。そして、神道研究の一般的な発展については、私の発表の中での「パラダイム転換について」という表現は、ヨーロッパとか西洋の日本研究が日本の研究を反映するのではないかと思います。もちろん、直接反映するわけではありませんが、ヨーロッパとか西洋研究の中の曖昧さは日本でもあるのではないかと思います。

各国ももちろん同じような傾向がありますが、とくにドイツ語の場合は個人レベル以上の特徴があります。つまり、前も言ったようにナチスとの関係のせいで、例えば、フランスの日本研究の場合は、伝統的な研究と現代的な研究はもっと自然につなげるような発展があると思いますが、ドイツの場合はちょっと不自然な状態です。そういう特徴も強調したいと思います。



【司会】ブレーメンさん。

【ブレーメン】私の疑問は、二元論にあります。例えば、神道は宗教か宗教ではないかというような。宗教を概念としても、明治時代につくられて、西洋の言葉から翻訳された概念です。だから、その概念で日本の神道を理解できるかどうか、私は非常に強い疑問を持っています。

もう1つは、戦前・戦後を単純な二元論で理解することにも疑問があります。精神について歴史を考えていくと、戦前もあれば戦後もあるし、戦時中の時代もある。そして、戦争で何が終わるか、何が続くか。そのようなことについての概念は大体政治的な概念になると思います。あまり文化人類学、あるいは日本学的な概念にならないと思っております。

最後のエスノセントリズムの問題についてですが、靖国神社問題に関連して、世界の各国で戦没者をモニュメントする、慰霊祭をやっている。ただ、日本人がそういう慰霊祭をやると、「それはいかん」と、西洋とかアジアの諸国から批判が出ます。

しかし、オランダを例にすると私たちも非常に悪い歴史があります。膨大な人を殺しているという歴史的なことがある。そして、オランダの資本主義は奴隷貿易政策のもとに非常に発達しました。そうすると、他文化を自分の概念で自分の価値観から理解しようとすれば、前置きをしたいと思います。そういう考え方は、多分個人的な考え方かもしれないが、それは文化人類学的な考えだと思います。

【司会】マセ先生お願いします。

【マセ】最初はフランスの宗教学とみずほの国、それは歴史の問題になります。というのは、20世紀の初めごろ、反キリスト教運動があって、やはり政教分離があって、そのためにフランスの大学には宗教のことに触れないようになりました。

だから、いまのところは神学というのはアルザス地方だけが国立大学で教えることになりました。というのは、20世紀の初めはドイツ圏のものだった。だから、1918年にアルザス地方がフランスに戻ったとき、やはり政教分離はもう出ていました。そのとき、アルザス地方はドイツ圏に入っていたから、その後でも神学は国立大学で教えることができました。しかし、いまでも宗教に対してフランスの大学は遠慮がある。そして民族のことも、それはフランスだけではなくてどこでもハジがあります。それは、民族というと植民地の民族の伝統が強かったけれども、例えばフランスの民族学をやるのは本当に先祖のものに

そして、日本語教育のことですが、高等学校のレベルでありますが、まだまだそのことは除かれています。だから、それは大学でしなければならない。また同じ状態です。大学としては 10 ぐらいになります。日本語の教育の設備を備えているところは。一番多いのは、うちの大学です。日本語でいえば外語大学みたいなところで、80以上の言葉を教えています。その中で学生数が一番多いのは、やはり中国語、アラビア語、日本語です。日本

語は3番目です。

【司会】ありがとうございました。ハーディカ先生お願いします。

【ハーディカ】大変貴重な6つのポイントでコメントを、本当にありがとうございます。 日本語教育のことですが、私個人が学生だった時代、つまり 60 年代後半は、まだ日本 語教育が大学でないとあり得ませんでした。

それにしても、学部生向きの日本語教育も稀で、主に大学院に入ってからが普通だったと思います。その後、割合に急なペースで変化をしてきて今度は両海岸、東海岸、西海岸、まあ州にもよりますが、大概小学校レベルから日本語教育があります。州ごとですから、南部とか西部とか、日系人がそれほど多くない場所だと盛んには行われていないようですが、両海岸沿いでは普通に、小学校でなければ、中学校もしくは高等学校からある程度の日本語教育が行われています。

行われているのはいいですが、内容を見てみると授業時間が限られていて、そして大学に入って来るとやり直しになったり、場合によっては、間違った日本語を覚えたものを覚え直したりする必要はあります。先ほどマセ先生のお話の中にも出ましたが、日本語と中国語の割合ですが、それは日経平均に沿って、日経平均が上がれば日本語のコースの人数もふえるという傾向がこの 2、30 年あるのだとわかった。いまは、日本語のほうが多少ダウンですが、今度日経平均が上がったらまた日本語教育の生徒の人数も上がると確信しております(笑)。

【李】それでは、僕も簡単に申し上げたいと思います。まず、日本語の教育に関しては提出した資料を参考にしていただきたいと思います。それから、文献中心から調査研究中心に研究方法のパラダイム転換があるということが言われましたが、大事な話だと思いました。韓国も神道研究においてそういう影響があります。調査ばかりだと困りますが、だからこそ既存の議論に囚われることなく神道に対する多様なイメージを作りだす肯定的な側面もあると思います。

神道研究者というよりは精神史、あるいは日本文化史の文脈の中で各々の神道のものを研究すればいいのではないかというお話は同感です。ただ、教育の中ではもうちょっと、さっき言ったようなある種のモデルがあったほうがいいのではないかということは考えています。

5 番目の最後は、近代日本と神道の係わりを日本の研究者はきちんと勉強し、説明できなければならないという趣旨のことをおっしゃいました。これについては、普段の自分の考え方を申しあけたいと思います。

近代日本と神道の係わりの問題、あるいは、神道と国家主義の問題などがテーマになる 研究がこれまで果たして生産的な議論として展開したことがあるかということに疑問を持っています。これは日本の内部だけではなくて日韓のあいだにおいてもそうです。これこ

そは発想の転換が必要な問題ではないかと思います。つまり、近代の国家神道への関心は、 国家と宗教との関係にだけ向けるべきではなく、むしろ、それでは説明できない多様な側 面に向ける必要があるのではないかということです。

戦後の新たな国づくりに立つ韓国の歴史教育において植民地時代のいわゆる朝鮮史観というものを克服することが最大の関心事でありました。というのは、日鮮同祖論や他律性論、停滞論などと言われる歴史認識は韓国の民族としての自尊心を傷つけるものであったからです。それ故、それに対する反論もまた非常に感情的なもので日本の民族としての自尊心を傷つける側面がありました。そうすると、日本の民族主義的な発言には韓国の歴史認識がいい加減だと言ってくる。近代の日韓関係史をめぐる議論の悪循環は周知のとおりです。

私は近代国家神道への議論もこうした悪循環から自由にならないと思います。最近、国家神道に対する村上説をめぐる日本内部の議論もそうですね。そして、そうした日本国内の議論に韓国が加わるとすれば事態はもっと厄介になるばかりだと思います。

村上説に対する神道側の反論は、韓国人の目から見ると、虫のいい人たちではないか。 そういう印象をどうしても持ってしまう。例えば、人が遺産を相続するときには、遺産だけではなくてその負債まで相続するのが当然ではないかと考える。もし、その負債を相続したくなければ遺産も相続しないのが現在の法律になっている。そうすると、近代の国家神道をつくり上げるときにつくられたさまざまな財産とか利益になるものは、そのままそっくりいただいた神道側が、そういう過程の中につくられた負債というか負担になるようなものは我々と関係ないというのは、おかしいというわけですね。

つまり、私の言いたいのは、近代国家と神道の関係に対して研究者がきちんと説明できなければならないという反省が、むしろ、非生産的な議論の量産に繋がる心配もあるということです。

【司会】ありがとうございました。林さん、いかがですか。

【林】いい意見だと思いました(笑)。近代日本の宗教史における神道という、私の場合は とくに神道をやっているわけではなくて、宗教史を通して近代史をやるという形です。そ こで、韓国の問題と日本は非常に重要な、単に学問的なレベルだけではなくて重要なパー トナーだと思います。それが、いろいろな言説のレベルですぐ対立してしまう。そして、 相互に誤解を生んでいるというのが現状だと思います。

私どもができるのは、学問的なレベルでディスカッションして、その視点の違いを認識することだと思いますので、「広い視野でやれ」という李さんのご発言はそのとおりだと思います。多分、このシンポジウムの第2回目は多分ソウルで行われると思いますので・・・(笑)。

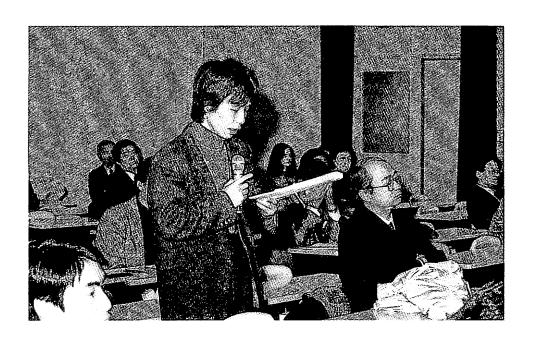
Ⅲ. 自由討論

【司会】コメントに対して、発題者の方々から応答をいただきました。ありがとうございました。林さんからは5点ほどポイントを出していただきました。日本語教育の問題とパラダイム転換の問題は神道だけではないというようなこと、これも重要な問題ですが、とくに1番目の、国ごとの違いという問題は重要かと思います。つまり日本とどういう関係をもった国における神道研究なのかという視点です。これは、日本の研究においてもそんなに意識はされていない点ではないかと思います。この点は、最後の5番目の近代日本の中での神道の位置づけと、どういうふうに係わっているのかという、これはぜひ展開させたいテーマだと思います。

4 番目もなかなか厄介ですが、おもしろい問題です。要は、神道研究者はいるのか。あるいは、神道研究という領域が成り立つのか。そういう根本的な問です。日本の中では一応、国学院大学に神道文化学部もありますし、神道研究者という言い方は定着しているようであります。しかし、とくに国際的な視点から見た場合の現実的な問題としての神道研究というのはどういう研究があって、設定できるのかというような、これも大きな問題ではないかと思います。

このあたりからフロアの方に議論に加わっていただこうかと考えます。フロアの方々が持っていらっしゃる関心をもからめて、議論を進めたいと思いますが、いかがでしょうか。

【門屋温】早稲田大学の門屋と申します。2点伺いたいのですが、1つ目は感想も含めてです。きょうの5人の方のお話については、海外では90年代以降、戦前と戦後の神道研究者ではない第三世代が登場するという印象があります。その人たちは神学的研究とか、



民族学的な研究、それから国家主義のイデオロギーとして近代宗教の研究する。そういう 研究でもなくて、いわゆる近代の神道観というものに縛られないでもっと広く、さっき林 さんがおっしゃいましたが、神道研究者というのは神道を対象として扱う。それも、密教 や芸能、文学といった非常に広範な分野から神道へアプローチをして、しかも、その内容 も教義や儀礼を含めて文化事象として宗教を考えている。

しかも、その人たちはいまのお話は国別という感じですが、そういうものを乗り越えて、 多分にインターネットの影響もあると思いますが、情報交換をしながら研究を進めていく というのが 50 代以降の世代、そういう若い世代の研究者が出てきているような印象が、 知っている範囲でもいらっしゃいます。具体的に言えば、前にいらっしゃるシャイドさん とか、さっきお話しがでたテーウエン (Mark Teeuwen) さんとか。そういった若い研究 者が一体、各国の研究状況にどういうふうに位置づけられているのか。

第2番目ですが、これはぜひ全員に伺いたいと思います。いま李先生がお答えになって しまいましたが、海外の研究者の研究状況から見て日本の神道研究の不満な点、注文、そ れから、こういうことができないのか、そういう点をぜひお知らせいただきたいと思いま す。

【司会】ありがとうございました。最初に李先生にお答えいただきたいと思います。

【李】第三世代の研究者の動向、あれは、韓国はこれからの問題としてたくさん出ると思います。いろいろな大学で日本学、または日本の文化に関心を持っている学生たちを育てる教育施設が、ソフトのほうは全然準備していないのにハードだけがたくさんある状況です。その中では、先生の言うことは古いから直接調査するとか、そういう人はたくさん出てくると思います。もうすぐ、そういう状況になると思います。

【司会】それでは、今の質問は、日本の神道研究に対する不満というようなことになるわけですが、残りの4人の方は、こういうことをやってほしいとか、こういう視点が欠けているのではないかとか、そういう注文はございませんでしょうか。シャイドさん、いかがでしょうか。

【シャイド】私自身は、神道の研究だけではなくいろいろな側面で、日本の学問は詳しい研究がたくさんあると思って本当に感心しています。その詳しい研究を一般的にまとめて、長い間の発展について概観するようなものがほしいと思います。 その点で、直接注文できないのかもしれませんが、そういう研究がもっとあれば役に立つのだろうと思います。

【司会】ブレーメンさん、どうぞ。

【ブレーメン】この質問に答える前に、教育問題についてちょっとお話ししたいと思いま

す。ハーディカ先生と同じで、日本の経済がよいと学生の数がふえる。経済状態がいいときには、100人、200人の1年生が来るが、今年は30人だけです(笑)。だから、そういう傾向が強いと思います。

でも、問題は、一日本の場合、今日も文部科学省のおかげでこの国際会議が開けました 一オランダ、オランダだけではなくて別の国でも、文部科学省はセントラルエクセレント だけに絞っています。その結果、非常にベーシックな教育は弱くなりました。

具体的な例を挙げますと、オランダの教育制度においては、「歴史」という科目はもうもうけられない。そうすると、うちの学生たちは、オランダが昔インドネシアを植民地にしたことを知らない人が多い、日本語の教育といっても文法がわからない人も多い。教育制度をつくり直さなければならないということになります。

次の点は、日本の神道研究に何を期待しているか。宮田登先生も「民俗神道」という言葉を使っています。私はもちろん専門の民俗学ですから、それに一番興味があります。その民俗レベルでの神道的現状を研究する機会があると思います。また、死者、戦没者に対する研究も広げていっていただきたいと思います。いままでは、そういう問題点についての研究は、一私は不勉強ですが一あまり見ないように思います。最近は、第三世代の日本の戦後生まれの学者たちは最近そういう問題に目を向けていますが、もっともっと深い研究が欲しいと思います。

【マセ】答えは、個人の問題になります。先ほども、ハーディカ先生は授業のお話をしました。先生は「『古事記』からオウム真理教」、ある意味で私の立場から言うとうらやましい。というのは、授業の内容は、日本史、思想史、もちろん『古事記』から始めますが、仏教、儒教、神道も入っています。莫大な量になります。欲しいのは、もっと専門的な授業を受けたいと思います。

【ハーディカ】注文ですか? 持ってこなかったのですが、強いて言えば、これはシャイド先生が先ほどご指摘されたことと関連しますが、日本の神道研究の主なものは割合マイクロレベルで行われているかと思います。国学ですと、国学者ごとの資料を集めて、一つ一つの文献を分析していくのが主だと思います。もちろん、それがすべてではないとわかっていますが、そのような貴重な研究とまた別のカテゴリーではもうちょっとメタレベルでの神道研究が考えられないでしょうか。

まだ自分の考えははっきりまとまっていないのでうまく説明できないとは思いますが、 例えば、国学を例に申し上げれば、国学のことをある意味で「反」あるいは「アンチ」コ ロニアル言説として考えられないでしょうか。

国学の歴史の中には時代ごとでまた、国学者個人個人の思想の中にはもちろん違いが多くて、すべては同じという意味では申し上げていませんが、外国に対する1つのアンチコロニアル言説として考えると、例えば、江戸時代の末期になってアヘン戦争のことを視野に入れて国学が盛んになったことは事実だと思います。そういう意味を含めて、もうちょ

っとマイクロレベルの研究が進むと同時にメタレベルでの神道研究ができるなら意義がも う少し広くなってはっきりしてくるのではないかと思います。

【司会】ありがとうございました。日本側への要求が出されましたが、国学院大学の神道 学科の岡田先生いかがですか。ややマクロレベルの研究が欲しいとか、概論的なものも欲 しいといったような要望に対して、一言お願いします。

【岡田莊司】日本でも神道の研究者は戦後少なくなりまして、戦前に比べると相当少なくなり、また基礎的な研究よりも周辺部の研究者のほうが増えてきたという感じです。ですから、諸外国よりも少ないかもしれない状態です。ようやく、こういう COE のプログラムができて神道を海外に発信するようになりました。いざ、海外に発信するとなると一体何があるのだろうか、いま実際に戸惑っているところです。それをいよいよ準備して、これからやらなくてはいけないということで、そういう気持ちがようやく出てきたところで、具体的なものが出てきません。

ただ、先ほど近代とか国学、あるいは外国から見ると国家神道とか、近・現代に係わることが関心があるのかなとは感じました。私どもは、どうしても古代とか中世のほうをやっていますのでそのあたりから一緒にできるかと。あとは黒田俊雄先生の名前が海外からは聞かれますが、その辺りで止まっているのか止まっていないのか、そういう辺りも聞いてみたいと思います。

【司会】突然の指名ですみませんでした。それでは、宮家先生お願いします。

【宮家準】最初に井上先生から話がありましたように、もう一つの柱として神道事典の英訳、それをいま一生懸命つくっております。ハーディカ先生が「『古事記』からオウム真理教まで」とおっしゃいました。あまり知らない学生に教えるときに、神道のこういう言葉が一番理解しにくいんだけれどもどうしたらいいかという。いわゆる、神道研究のキーワードみたいなもので、学者に対しては理解しにくいようなところがあったら教えていただければ、それに組み込んで井上さんが英訳をされると思います。

せっかくの機会ですから、我が国神道研究者の先生方から、この言葉はどうも説明しに くいんだけれどもとか、こういう言葉は学生に説明しやすいようにしてほしいという要望 がありましたら、それぞれの先生方からご意見がありましたら、国学院としても井上さん が中心になると思いますので、よろしくお願いいたします。

【司会】それでは、別の方からのご質問をお願いいたします。はい。

【平野孝國】先ほど李先生にお伺いすればよかったのですが、最初に、韓国においての漢字教育はどんなふうになっているか、そのことを1つお答えいただきたい。日本では漢字

をぐっと制限してしまったために、『日本書紀』や『古事記』は全然読めないです。韓国で はどうでしょうか。

【李】韓国では一時期、国語愛運動という言葉があって、教科書から漢字をなくした時期が6年ぐらい続いたでしょうか。僕らの世代がちょうど学校教育の中等高校のときに当たるのですが。しかし、それでは実用的に都合が悪いというので、またその反発もあって、それで未だにそういうグループは右寄りというか、それを主張するグループはありますが、教科書では漢字が使われるようになっています。

【鎌田純一】李先生に質問ですが、質問の前に、明治以降、朝鮮総督府が、例えばいまの韓国、半島の各家々にお札を配り歩いて家の中に神棚をつくれ。それを警察が後で本当に祭っているかどうか調べる。そういうことを聞いたことがありますが、明治新政府の神道行政というのは、韓国だけではなくて日本に対しても、例えば、人民に対してもとんでもない失政をしているのです。そういったことがありますので、被害者はそちらだけというのではなくて、また、その時代だけの神道をやるのではなくて、ということでお願いしたいと思います。

ほかの先生方は民俗学、文化人類学ですが、韓国で百済方面ではなくて新羅方面、そちらのほうの民俗学がどの程度進んでおられるか。そういったところからすれば、神道の根源に係わるものもあるのではないか。慶州の博物館に行っても、神道と係わりがあったと思えるようなものもあるわけです。そういったことからして、神道の根源はすぐ近くのところということからして神道の根源的なもの。そして、『古事記』の中に新羅から来た国王、これは我々も研究しなければなりませんが、北のほう、葛城のほうでは渡来人系の神々をお祀りしているところがありますし、埼玉県の高麗神社がある。

日本に来た場合にそういう形で祀っておりますが、そういう明治以後のものだけが神道ではない。神道の根源に係わるものというところを研究しなければなりませんが、そういう共同研究を、ことに李先生のところで、そういう民俗が発達しているかどうか、そこら辺をお伺いしたいのですが。

【司会】 李さんのご発表にありましたように、まだ神道研究が始まったともいえないという 段階であるということでしたので、鎌田先生がいまおっしゃったようなことは、今後の課題にしていただくことになるかと思います。

では、初めて質問される方ということで、山中さんどうぞ。

【山中弘】筑波大学の山中です。先ほどから出ているので、私があえて質問する必要もないかもしれませんが、先ほど林先生がおっしゃった4番目の、海外において神道研究者がいるのかという、その問いというのは非常に重要だと思います。

というのは、海外において神道研究者がいるのかという話は質疑応答の中で出てきてい

るわけです。つまり、どちらかと言うと日本の質問者は神道研究を実体化する形で何となく質問したのに対して、いま海外からいらっしゃった諸先生方は、「いや、そうではなくて、神道研究という分野はないのだ」というような形で話が出てきたと思っております。

その場合、海外に神道研究者がいないという話は、単に数が少ないというような問題ではなくて、やはり日本人が神道研究をかなり実体化して自明のような形でとらえているということの持っている問題みたいな問題を、この話は提起しているのだろうと思います。

その意味において、私は神道研究者ではありませんのでこういう質問は適切でないかも しれませんが、先ほどから何人かの国学院の先生方がお答えになっておりますが、いまの 海外には神道研究者がいないという、そういう問いに対して、「いや、神道研究というのは こういう形で」という形でお答えになりましたが。そういう問いに対して、どういうふう にお答えになるのかということについて別の先生にちょっと伺いたいです。

壇上の先生にというよりも、参加された国学院の神道研究の先生に対して、こういうような問いに対して。これは非常に大きな問題で、林さんが言った5番目の、近代におけるヨーロッパの宗教研究の問題、神道研究の問題とつながっていく問題だと思いますので、ぜひ、その辺をお聞かせ願いたいと思います。

【司会】火中の栗を拾うのはどなたかということになりますが……。では、宮家先生どうぞ。

【宮家】私は国学院の神道文化学部に所属していますが、先生方のお話にもありましたように宗教は送り手ではなく受け手、それを通して生活がわかるような形でやっています。 私は民俗宗教をやっております。神道はその1つでありますし、仏教もその1つであります。

海外の先生方は日本文化全体をとらえようとされておりますから、当然のことながら神道にこだわらなくて広くとらえられていると思います。私どももあまり神道という枠にとらわれないで、もっと広く日本人が何を必要としているのか。その中の1つが神道だ、そういう立場に立って研究すべきではないかと思っております。

その点、神道プロパーではなくて、むしろ受け止め手の側で日本文化、つまり、日本の 生活を考えるという、そういう学問でご理解いただきたいと思います。

そうした意味で、ぜひ先生方から、そうした広い意味で日本人を知るときに、さっきもちょっと出しましたが、どういう言葉が理解しにくいのかということを教えていただきまして、神道学の幅を広げるというのが神道文化学部をつくった1つの理由です。そういう意味で、受け止め手の生活に合わせたときに一体神道がどうなのか。そういう視点で外国の研究はずっと進んでおられますし、日本も、私自身はそういう立場なものですから、その点のことをちょっと。お答えになりましたでしょうか。

【山中】そうしますと、タイトルの「各国における神道研究の現状と課題」というのは、

「各国における日本宗教研究の現状と課題」というふうに変えても別に構わないということでしょうか。

【宮家】私個人的には、上にありますように「神道と日本文化の研究」ですから、今回の場合も広げても構わないと思います。きょうそこにいらっしゃる先生方から、自分たちが日本のことを教えるときにどういうキーワードが一番理解しにくいのか、それを教えていただきまして、むしろ日本文化研究の中で神道がどうあるべきか、そういうことをこちらが考えることですから別におかしくはないと、個人的には思っております。

【司会】このタイトルを考えたのは私なので(笑)。もちろん、これを「日本文化」に変えるという立場もあるのでしょうが、私はやはり「神道」という言葉を前面に出したいという希望がありました。しかし、ご指摘があったように、その実態というのがなかなかわからない、どう定めていいかということですね。とくに外国からすれば、明確にイメージが形成できないということ。これは、山中さんがおっしゃったように、逆に我々の課題であるうと思います。

そして、先ほどからも要望が出されましたが、概論的なものがほしいとか、メタレベル の研究がほしい。これはまさしく検討すべき要求であると感じています。個々の細かな研究はあるけれども、それをつなぐ糸として、一体、日本の研究者は何を出せるのだろうか、出しているのだろうか、そういう問いだと思います。

もちろん、個人的に、「できる」とか「できない」とか簡単に答えられるものではありません。けれども、私としては、「最初からそんなものはないのだ」というふうに答えてしまうと、それはもう神道研究という領域が成り立たないということだと思います。

極めて明確に、例えば、日本仏教史みたいな形で、神道史を叙述するのは難しいかもしれない。しかし、まあ日本文化とほとんど同意義だというような曖昧な言い方では、どうも能がない。やはり、その中間のところをいくつか試みてみようということです。これが、神道研究にとっては当然課せられる1つの課題だと思っております。そういう意識で、私自身はこのタイトルを選ばせていただきました。

では、関さん。関連してでしょうか?

【関一敏】はい。九州大学の関です。いまのご発言に関連して申し上げますと、今回のようなシンポジウムですと、やはり「日本の研究の現状と課題」というパネラーを1人設ける、あるいは2人設けることが必要だと感じます。確かに、圧倒的にすごい分量と質の研究が積み重なっておりますから困難ですが、それをやらないとシンポジウム全体の水位が上がらないのではないか。

宮家先生に逆らうような発言をして申し訳ないのですが、やはりこれは「神道研究の現状と課題」であってほしいと理解しています。これが仏教なら仏教でもっと容易にできるだろうと考えますが、あえて「神道」と置くことによって、むしろ、我々の研究といいま

すか、日本人が日本を研究するときの我々の構えにフィードバックするようなシンポジウムになり得るだろう。仏教の場合はそうなれないとは申しませんが、神道よりははるかに 希薄だろうと思います。

あえて「神道」と置くことによって、むしろ、日本人による日本の神道研究、とりわけ神道学というふうに自認され、周りもそう認識される方々がどのように自分たちの研究をまとめ、そして、それを踏まえて海外に発信していくのか。そういう課題をこのシンポジウム、及び COE が担っていると思うのです。

【司会】では、新田さん。

【新田均】皇学館の新田です。近代神道をやっております。その立場から、いま出てきているお話で、これはそこにいらっしゃる先生方に質問するというわけではなくて、研究全体への私の提案です。

近代に関して、神道という実体はあったのですかという問いは持ってほしいのです。国家神道という実体がありましたという。何か近代に入ると、神仏分離以後はナショナリズムは神社が担い、それ以外の個人救済は他の宗教が担ったのだという先入観があって、ナショナリズムの論理だけで神社信仰が説明できるかのような誤解があるのではないか。

例えば、きょう話題になっていた神社非宗教論にしても、これが政策として挙がってくるときに最も強力に主張したのは浄土真宗でした。だから、靖国神社を中心として慰霊の問題でも、慰霊体系が別に神社だけで完結するわけではなくて、近代の軍隊にも僧侶がついて行って現地で慰霊祭をやっています。そういう複合的な、まあ近世とは違う形の役割分担になり、相互影響というのがあって、近代での仏教のあり方、神道のあり方が決まってきている。しかも、その時々のあり方は、例えば神社非宗教論にしても出てくる背景は宗教進化論に近いところ。そこに当てはめれば、神道は最も遅れた宗教になるではないかというような課題を突きつけられて、では、それにどう答えるかというところで、「神社は非宗教」というような考え方も生まれてくるわけです。

そうすると、近代のいろいろ入ってきた思想とか、宗教学、相互関係を無視して、近代の神道のあり方というのも決まってこないので、そういう意味で、私の課題でもありますが、当時日本に存在したさまざまな宗教の相互関係、そこに外交、政治状況、さまざまなものを含めて初めて近代の神道のあり方が見えてくるのではないか、というような視点を持っていく必要があるのではないかと思っております。

【司会】これは、どちらかというと国内の研究にとっての課題という面が強いですね。

【磯前順一】きょうのお話は非常に興味を持って聞きました。私としては関さんと山中さんの意見に近かったです。各国における状況が、政治的なポリティカルな問題と絡みながら、神道のイメージの多様性が出てくるという話があったと思います。ただ、その多様性

をトランスナショナルだとか、神道の普遍性がという話にしていくと、ナショナリズムと 結びつきながら神道が出てくるので、各国での取り込み方、ないしは朝鮮半島のように植 民地か、などそれによって違ってくるかと思います。

そういう意味で、では我々は多様なんだけれども、その答えは、何もわかってないのではないかという話になる。我々は、それに対して、たしかに今日のお話は多様ですが、神道学あるいは神道研究の固有性はないというのが一貫した話で、山中さんがそういう話だったと思うのですが、それに対して、日本は自明と思っていた。我々だけがそう思ってしまったのはなぜだろうという形で、一度問い直してほしい。

そのときに、いま新田さんがおっしゃられたようなさまざまな西洋に対する、あるいは ハーディカさんが言われたアンチボストコロニアルについても、ナショナリゼーションの 反応としてとらえ返せると思う。それで、メタレベルでの歴史の形成過程をとらえられる。 それは当たり前で、我々の社会で神道が日本社会においてのみ、ナショナルなもので構成していた。 そういうところを引き付けていかないと、わかりませんというのでは物足りないという気がします。

【司会】神道研究として今までイメージされていたことが、各国での研究の状況を前にして、疑問にさらされるところがある。それを踏まえて展開するのがいいのではないかというご趣旨ですか?今のご発言、私、ちょっとポイントをつかみ切れていないかもしれません。もう一度お願いできますか?

【磯前】神道が相対化されて、日本の神道研究が固有性がないという話ですが、外国では 固有性を持ち得なかったのに、なぜ日本では持ちえてしまったのだろうということです。



なぜ日本が固有性を持ちえたかということを引き受けたい。そういう受け方は、多分、先生のお話とかみ合うのでしょう。

【司会】なかなか理解できかねるところがあって、壇上の方々も首をひねっておられるようなのですが、どういうことでしょうかね……。

神道研究が成り立っていること自体への疑問ということですか。日本では例えば、神道研究とか神道学といえばあると自明のように感じている。まあ、それも本当にそうかどうかわかりませんが、一応言葉はあります。そのことをもう1回相対化しろというような意味でしょうか?

【磯前】そういうことを検証するという志だけでもいいわけです。問題として、ディスコースとして、1 つの可能性として、神道、あるいは神道研究は、ある種の固有性をなぜ持ち得たのか。疑問というよりも対象化してあとづける。これがハーディカさんが言われるメタレベルということに対する私なりの受け止め方です。でもこれはコメントということにしていただいていいです。

【司会】分かりました。時間が延びてしまい、ここで切るのは本当に申し訳ないのですが、 どうしてもという方はいらっしゃいますか。では、中野先生、手短にお願いいたします。

【中野毅】創価大学の中野です。最後の議論は大変おもしろい議論でございまして、私もいろいろ考えていました。神道研究という言葉とか、そういうジャンルがつくられたのは 戦後だと思っています。戦前とか戦時中には神道研究という領域はありえなかった。



神道とか、戦時中にいわれた国家神道というのが日本文化全体の中心的な役割から下りたなかで、日本の固有の文化としての神道みたいなものをはっきりさせて研究しようという大きな政治的イデオロギー的な流れの中でできてきたような気がしています。

ですから、日本における神道研究の成立、機能についても、これは日本研究者だけではなくて海外の先生が研究していかなければならないだろうと思っています。つまり、神道は日本固有のものだという考え方を、我々自身も乗り越えていかなければならないのではないかという気がしています。

私も昨日までソウルにいたのですが、韓国の田舎に行って感じたのは、やはり日本の文化と韓国の親近性みたいなものが強くあるということを印象です。神道を固有の意味での、つまり、制度化された神道として研究するのではなくて、もっと広い意味での相互の文化のなかで比較研究する必要があります。朝鮮半島なら朝鮮半島の文化と日本神道の基礎にあるもの。そういった広い意味での比較研究が求められている。そういう研究についての議論も、恐らくこのシンポジウムでやっていくべきだろうと思います。

そうすると、単に朝鮮半島と日本の基層文化の問題だけではなくて、恐らく、シベリアのシャーマニズムとインディアンの文化の類似とか、そういう文化との違いみたいなものとか、さまざまな形で、日本固有だと思われていた神道文化というものをもっと広い、それから長い視野の中で、もっと相対化していかにとらえられるかということになる。そういうことも国学院大学の COE プログラムでやっていただきたい。国学的研究というだけではなくて、やはりもう少し広い視野でやっていただきたいと思います。

【司会】ありがとうございました。期待の言葉と受け止めさせていただきます。

本来なら、最後にご出席の先生方に簡単なコメントをと思っていましたが、時間が大分押してしまいましたので割愛させていただきます。

後半の議論は、なかなか重要なテーマだったと思います。そもそも、神道という概念を どう鍛えていくか。それも単に日本の中だけで考えるのではなくて、各国の神道研究の現 状を見ることによって、よりダイナミックに概念を鍛え直すという作業。これはシンポジ ウムの2回目、3回目でも、何らかの形で継続しなければならないと思います。そのほか にもいろいろな議論が出されまして、下手にここでまとめてもかえって混乱する可能性が ありますので、次回以降のシンポジウムで、今日の議論を引き継いでいくことを心がける という、お約束だけをいたしておきます。

長時間にわたって会場で聞いていただいた皆さん、そして発題してくださった方、コメンテータの方々に御礼の言葉を申し上げます。これにて、シンポジウムを終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

追記:シンポジウムの報告書を作成するに当たり、パネリスト及び国内招待研究者には発言内容を確認してもらったが、フロアからの質問者の発言に関しては、基本的にシンポジウム委員会でまとめた。もし誤記等があった場合は、編集側の責任である。